食糧暴徒とアメリカ革命

茨木慶三

はじめに

「下（民衆）からアメリカ革命をみる」[1]重要性は、何人も否定できない。本稿が、スミス女史（Barbara Clark Smith）の論究[2]に従って、独立戦争期の食糧（物価）暴徒をとりあげる最大の理由はここにある。

ところでアメリカ群衆は、一七七六年から七九年の間に三〇回以上、食糧を隠匿した商人に立ち向かい、「不当」な商店主を脅迫して、砂糖・茶・パンに及ぶ欠乏した商品を強奪した。[3]これらの暴動は、少くとも北部五邦で勃発し、一小事件にすぎないことも、深刻な持続した闘争の場合もあり、また、群衆のかなり大きいマイノリティが女性から成っていた。彼らは、商店主の法外な価格や、商品を市場に出さないやり方に反対し、また、それぞれの群衆が特定の局地的不満を口にする一方、ときには他の場所の行動を知り、各エピソードをより広い事件の一部とみなしていた。

思うにこれらの暴動は、歴史的事象のいくらかの流れの交差点で発生した。すなわち、第一にそれらは、アメリカ、とくに北部諸邦での長期的な資本家の社会関係の発展における一時期を象徴する。暴徒の行動は、経済上の交換や、誰が交換管轄権をもち、どのような政治的

様式を通してかといった重要論点についての民衆の見解を表現している。第二に、独立戦争時代の物価暴動は、旧世界の先例を見習った。そしてしばしば、中・下層階級の人々は、高物価や出品停止に異議を唱えて裕福な隣人に抵抗したが、その場合彼らは、イギリス人としての権利・慣例に対する自分たちの権限を主張した。[4] 第三に、参政権も、陪審員資格もなかった女性自由民が、暴動の約三分の一を行なった。ここに、抵抗や革命が、共和政体下の母ないし妻としてではなく、家庭・隣保・市場内での経済的関与者としての婦人に開いた政治的行動への可能性があり、本来厳密に公私のいずれでもない、社会生活への女性の自立的で日常的な参加という背景から、食糧暴動史を考察しなければならない。[5] 最後に、独立戦争は、供給の混乱と需要の倍増、値下がりする紙幣への依存、激しいインフレが原因で、暴動勃発への不可避な背景を作り出した。[6] そのほか、暴徒のメンバーや彼らの活動を書き留めた新聞記者は、これらの事件と愛国運動の間に基本的な関係が存在するという確信を表明した。様々なやり方で暴徒とその盟友は、商人と立ち向うことは、戦場で本国兵に対抗するのと同様に愛国的行動であると主張した。この結果これらの暴動は、大英帝国からの独立と植民地での自由のためのアメリカ人の運動に、新しい決定的に民主的な角度の見通しを提供するものとなった。

一

一七七六年七月、出入港禁止令と交戦状態を利用してますます不足してゆく商品（ラム・糖みつなど）の値段をつり上げた、ロングメドウ（マサチュセッツ）のある小売商が、群衆に強要され、彼らの求めたレベルまで価格を引き下げた。しかし同地のもう一人の商人コルトン（Samuel Colton）は、群衆の要求を拒否したため西インドから輸入した食糧を没収・秘匿され、改善を誓約してようやくその食糧を返却してもらったが、数週間以内に再び価格をつり上げたので人々は、彼の錠をかけられた倉庫に乱入し、ラム・砂糖・糖みつ・塩を運び去り、タウン書記のもとへ配達、書記はこれらの商品をほどよい値段で売却、最後に群衆リーダーは、売却収入をコルトンに提出、彼が受け取りを拒否したとき、立会人の下で代金を彼の家の机上に置き去った。さらに一ヶ月後、フィシュキル（ニューヨーク）の女性グループが、極わめて法外な代価を茶に要求したある参事会員に対して、婦人委員会を選出して彼の店に行進、彼が一ポンド九シリングで茶を手放すこ

とを拒否したので、最近大陸会議が公認した一ポンド六シリング（大陸紙幣で）しか支払わないと通告した。結局彼女らは一文も払わず、事務係と計量係を任命、茶を一ポンド六シリングで売却することとし、茶を預った女性たちは、新聞に公表して売却収入を郡革命委員会に送付することを計画した。[7]

従来いくらかの史家は、この時期の物価暴動や物価立法を単に戦時事情への対応とみなしてきた。しかしこれらの食糧暴徒は、自分たちを愛国運動の参加者と位置づけた。公開された新聞は、暴徒の見解を詳述し、農産物を市場に出さない農民や役立つ商品を独占して物価を引き上げた交易業者を非難した。暴徒にとってこれらは、通常の不満以上のもので、「大英帝国について不満である抑圧とまさに同じもので」あった。すなわち、より深く分析すれば、暴動は対英抵抗の起源にさかのぼることができ、愛国運動の中心深くにはめこまれているのがみいだされるのである。[8] 十八世紀の暴徒は、抑圧が単に経済的ないし政治的な不幸であるばかりでなく、両者のいりこんだ不幸であることを気づかせたのであった。真正ホイッグその他の著書では、政治的抑圧と経済的なそれは互いに他を包含し、ほとんどの人が両者のもつれをほごすことは不可能と考えたのである。[9]

そもそも北部農村の多くの人々は、まず家族や隣保のために生産し、日常的に労働・道具・製造品・農産物を交換し、局地的恩義のからむ入り組んだネットワークのなかで生活した。従ってこのような家族は、社会的・倫理的わく組内での経済的取り引きに通じており、この背景での交換は、慣習的で公正とされたことに関する広く共有された局地的見解に制約され、精通させられ、動かされやすい。こうして道徳実践家が、交換は他人を犠牲にして利潤をもたらしてはならない、相互に有益でなくてはならないと論ずるのはもっともらしいことであった。隣人間の相互依存の期待を冒とくすることは、一部は、それが罰せられずに期待にそむくのに有利な立場を必要としたがゆえに、抑圧的と考えられた。狭い経済的な言葉で、彼らの取り引きを描写するのはふさわしくなかった。[10]

一方植民地アメリカは、海外交易が盛んで、都市住民は交易で栄え、周期的不景気の間苦しみ、農村の農民は欧・西印市場向けに生産し、多くの農村の人々は商店主の棚を満たした輸入品を歓迎した。大抵の植民地人は、局地的交換のほか、より広い市場で売買し、こうして彼らの経済は、「過渡的」であった。[11] 人は、地理的輪郭のみならず社会的・経済的なそれに沿った変転期のアメリカを心に描けばよいが、他方大西洋市場へのかみ合いは、どの社会内でも不揃いに進行した。そこで多くのタウンでも海港でも、大西洋市場にはめこまれていたにせよ、

庶民は、パン条例に依存し、飢きんのときには食糧獲得のために当局の活動をあてにし、公然と伝統的な規制を弁護した。営利化は社会的不平等を増大し、異なった階層間の関係を緊張させ、通例の規制への要求を生じさせ、ときとして中・上流層住民もともに社会秩序に必要なこの規制を支持した。[12] また、北部社会の過渡的性格は、個人の意識や行動に現われた。農民やアーティザンは、労働を隣人の農産物に代え、近くの商店主に灰汁や材木を供給する一方、西インドで製造されたラムやイギリスから輸入された衣類を購入して、局地的および遠巨離交易に参加した。いくらかの植民地人は、一つの思考と活動のパターンから他のパターンへの途上にあると考えられるとしても、他の植民地人は、市場取り引きと局地取り引きを継ぎ合わせて均衡のとれた調整をみい出した。いずれにせよ市場参加は、様々な結果をもたらし、結局、大西洋市場の価格構造に対しての農民の増大するさらされやすさのために、隣保理念が局地取り引きへの少くともより貴重な基準となった。そして北部植民地を調査すれば、市場タウンでも辺境村落でも同様に、その内部に存在し、男と女、貧者と富者に一様でなしに関係した多様でしばしば相争う勢力を記録しなければならない。我々は、営利的活動や見解を広める市場中心地の能力のみならず、商業的成長が積極的に伝統的ないし慣習的拘束を支持した仕方に注意しなければならない。ここに我々は、中心地から離れたタウンを、局地交換の慣行のために多様な階層と利害関係者の住民が雇われ、有力な近住の理念が生じたところの創造的な場所と認めなければならない。

ところで、抑圧の可能性についての著しい警戒は、この差異と変化の状況に本来内在したものであった。他のどの要因より以上に、海港や田舎で感じられた明白で増大する不平等が、十八世紀半ばに感ぜられた驚きをあおり、緊張が市場でのある人の優位と他の人の財産喪失や時折りの激しい欠乏との明白な対置を全面的に広げた。[13] 隣人たちが市場でときどき違った経験をしたため、相互依存のきずなは損なわれ、植民地人がより広い関連の輪をえるにつれて彼らは、局地的基準や見解への自己の責任を限定した。だがまた等しく同時に、この過渡的契機から抑圧に抵抗するのに役立つ手段や様式もやってきた。アメリカ人の局地的ネットワークと近住の慣行への持続した関与が、抑圧を明示すべき関連のある経験、よって立ち、行動すべき代わりの基盤を提供した。

さて、これらの様式の活力は、イギリスの植民地政策が経済的交換の公明正大さについての重要な論争を提起した一七六〇年代半ばに、劇的に明白となった。イギリスの重商主義政策強化は、既に多くの人が市場参加と結びつけた不利益を倍化した。そこで多くのアメリカ人は、独立を回復するために大西洋市場から手を引き、局地的生産・交換のネットワークに再従事、そこに内在する習慣を受けいれることと

なった。エリートも民衆も、すべての人は大義のためにもうけを無視した。こうして、一七六四・六五年の交易ボイコット、広く考えて、経済的・文化的活動の政治的意義を強調した対英抵抗運動において、物価と愛国主義とは結合した。愛国主義者は、輸入、消費、手もとの商品や農産物の値上げをしなかった。[14]

同様に重要なことだが、対英抵抗運動は、男女庶民の政治参加に著しく依存した。自薦のグループや個人が、間もなく非消費・非輸入協定を取り締まった。局地的に選ばれた委員会がこれらの協定の実施を始めたとき、委員は、ボイコット違反を発見・鎮圧するために継続して民衆の監視に依存した。しばしば群衆は、委員会の会合に出席し、委員会の希望を実行し、委員会の大権をさん奪さえした。抑圧を防ぐ人間の能力が、大西洋市場からの一定の独立に由来したとすれば、だからこそそれは、そのなかで隣人たちが互いに責任があると考えられた局地社会の様式への依存を伴った。対英抵抗によって民衆は、一方で大西洋市場に、他方で局地的交換の世界に相対して、自己を再調整したのであった。

二

西インド商品が急騰し、植民中のタウンや郡が通商断絶同盟実施のために動員された英米戦争の発端に、農村でも都市でも各地を舞台とする暴動が発生した。[15] これら集団参加者は、単一の社会的・経済的階級に限られなかった。貧者も富者も、エリートも民衆もメンバーであった。これらの群衆に関して苦情を述べた人々さえ、努力の階級的性格を弾劾することはめったになかった。エリートのメンバーがしばしば役目を果したことはないけれども、中流層の農民、アーティザン、商店主さえ、道徳ないし愛国的感情に逆らう出品停止、物価ごまかし、同種の行動に直面して、市場取り引きの管理を自分が引き受ける気にさせられた。もちろん同時に、主として下層階級から構成された群衆も確かに存在した。例えば一七七七年に、チャールズ一世捕縛者（Cornet George Joyce という仕立屋）にちなんでジョイス二世と呼ばれた人物（ボストン商人で、通信委員会のメンバー）がリードした五〇〇人は、主に小アーティザン、徒弟、労働者の階層の出身者であった。[16] もっとも下層階級の群衆には、どんなエリート代表も伴はないのがより普通であった。それはともかく、群衆の気質は、ときとともに変化

した。すなわち戦争のより後期には、物価暴動はより都市的となり、それに応じて都市下層階級の信念や不満をよりよく表わすものとなった。戦争初期には、輸入品の価格が国内産物のそれより急速に上昇、その産物が通例以下しかラムや砂糖、衣類や金物を買うのに役立たず、かつ、農村商店主が法外なもうけを求めたために問題をより悪化させていると疑った農民が、食糧暴動の伝統的様式への親しみを示した。しかし一七七〇年代末までに、農産物の価格が輸入品を凌駕し、経済的苦痛と食糧暴動がともに都市に激しく集中したわけであった。[17]

暴動の場所の変化は、また食糧暴徒の社会的・政治的基礎の狭まりを反映する一方、随伴する変化が、群衆が革命当局にかかわる仕方で生じた。既に一七七五年の食糧暴動（うわさ）の場合に、住民と局地革命当局職員との間に抗争がみられたが、七六年ロングメドウ群衆は、物価ごまかしの告訴に対してコルトンを無実とした局地委員会を無視した。また同年キングストン（ニューヨーク）の女性群衆は、委員会会議場を取り囲み、茶を与えてくれなければ「夫や息子をこれ以上戦わせない」と脅かした。委員会がその職務にのろまであるとか、軍用のために商品を市場に出さないときには、委員会は暴動の目標とされた。一方ニューヨークでは、群衆が当局に茶の売買に介入することを強要、同地領地会議は、二五ポンド以上の茶のストックを押収・売却することを局地委員会に命じた。同会議は、委員会の介入を指令することによって、商人の不当利益を押えるだけでなく、暴動を終らせようと希望した次第である。[18]

一七七六年末までに群衆は、ときどき不活発な委員を活動にかき立てたのみならず、委員会を支持、脅迫し、さらにそれに取って代わろうとした。食糧暴動でアメリカ人は、愛国主義の実行をめぐって局地愛国派リーダーと協議した。委員会、邦政府、大陸会議のメンバーが、このような群衆と十分に上手くいかなかったことは驚くにあたらない。確かにしばしば暴徒は、これら公式組織の決議を実行した。しかし当局は、暴動に依存しようとはしなかった。大陸紙幣の価格下落の影響を懸念して七六年末ニューイングランド四邦は、紙幣を公私で法貨とし、多数の国内商品と輸入品および労働の最高価格を定め、また市場への出品停止を禁止する法令を制定したが、邦リーダーは、群衆が街路、商店、市場、波止場に行くことを求めはせず、民衆は違反を委員または他の市職員に報告することとし、委員会も、非合法な様式で行動することなく、司法機関を通して違反者を訴追することを期待した。だが物価統制政策は、広い民衆の警戒に依存せざるをえなかった。民衆は、委員会が違反者の名前を公表しつづけ、輸入業者、喫茶愛好家、その他の違反者に対すると同様、商品独占者および隠匿者との交易をしゃ断すべきことを当り前だとした。アメリカ人は、司法機関や検察職員が定めた基準や処罰を受けいれるよりはむしろ、自己の厳重

な公正基準と不公正救済策を選択しつづけた。明らかに多くの人は、司法機関が民衆が満足するほど十分に正義を実現するかと疑っていたのであった。[19]

委員となったボストン商人が、違反者に対して効果的に行動するのをためらったとき、タウンミーティングは委員会の無活動を認め、交易に携わらない三六人から成る補充組織を任命した(七六年三月)。ボストン住民は、司法機関でなく、新聞やタウンミーティングによって違反者に対抗した行動をとるように、新しく人々が任命されることを勧告した。穀物や農産物の供給が欠乏するにつれて、タウンミーティングは委員会を無視し、直接タウンの商人にその麦粉所有物を申告し、最高価格と売買諸法を遵守することを公式に求めた。これらの措置は一時的救済となったが、一ヶ月もしないうちに、パン屋は家庭にパンを割り当てねばならなくなった。不足がますます深刻化するにつれて緊張が高まった。七七年四月一九日、ジョイス二世のリードした群衆によって、五人の独占者が荷馬車でタウンの外へ追放されたが、このときジョイス二世らは、交易業者に規定の価格で小売するように圧力をかける一方、民衆の怒りを直接私財押収から遠ざけて、より象徴的な行動様式へと向かわしめたのであった。つまり二世は、商人にして革命委員会のメンバーとして、下層階級と商人との間の中間の道を切り開き、穏和勢力として行動しようと試みたといえよう。委員たちが、群衆の急進主義のために多くのボストン住民のなかに驚がくが惹起されることを明らかに予期したときに、公式にではなく暗黙のうちに、二世が委員会のために行動したことは、意味深長である。しかしI・スミス(Isddc Smith)という商人は、やり方の不法さ、「名ばかりの告発さえせずに」人を罰する群衆のずうずうしさに心を痛めた。彼は、真のトーリィを弁護しないが、裁判所を無視する群衆が、団結を助長するよりも分別ある市民を運動支援から疎外しそうだと断言し、また彼は、集団で行動して、普通のボストン住民に誰が愛国者で誰がトーリィかを決定することを引き受けるように励ますなんて本当に過激だと特筆した。[20]

ところで、民衆主導権は、単なるイギリスからアメリカへの権力移行を求め、群衆を、委員会さえをせいぜい暫定的に方便と考えた愛国派をとくに悩ませた。インフレや食糧暴動の発生率の増大につれて、「穏健な人々」は、公正な取り引きを革命の中心におく政策に疑問をもった。独占者、出品停止者、価格ごまかし屋を敵との確認は、愛国商人その他の不満の増長を惹起した、その結果、いくらかの愛国派リーダーは、物価と愛国主義を切り離す財政政策を提案した。こうして一七七七年半ばまでに商人とその同盟者は、物価統制法を破棄するよう

に邦政府に圧力をかけ、農村地帯や都市消費者のなかで物価統制法への人気が持続していたにもかかわらず、彼らは、マサチュセッツとニューハンプシャーで同法破棄をかちとった。[21]

しかし、記録された法令のあるなしにかかわらず、ボストン住民は、公正な交換を実施する権利があると主張、七七年七月の数週間、「タウンには、多くの不穏集会や騒動があった」といわれた。[22] さらに七七年の最後の月間に、群衆が独占商人に対する攻勢的対決に没頭した。例えば、ボストンのある隠匿商人の店に集まった約五〇〇人の住民は、代表を特派して愛国派リーダーと交渉、リーダーと自分たちとの双方が受けいれる価格でこの商人の砂糖を分配させることを承諾させた。その上間もなく群衆は、この商人の在庫に愛国急進派として著名なシアズ（Isaac Sears）を含む他の商人の保有した砂糖をくわえた。ボストン委員会の三委員は、七八年夏まで砂糖の売却を監督した。この場合愛国派リーダーは、群衆を指導するよりむしろ、自分たちが彼らと交渉し、自分たちないし委員会をタウン職員に対処させた「暴徒」と直面していることに気づいた。このような物価暴徒は、重要な点でヨーロッパや植民地時代の先例からはずれ、また自分自身が、革命の方向づけにあたって積極的な役割を演ずるつもりであると知らせたのであった。[23]

さて愛国派リーダーは、自由交易支持の主張が影響力をもつにつれて、次第に物価法と愛国主義を公正な価格やより広く定義された経済的倫理とを結びつける革命の目的の定式化とに顔をそむけた。七七年夏ニューヨーク領地会議は、茶を奪って自分たちの適当とした価格で売却した群衆に対して、厳しい難色を示し、何人もその人の同意ないしその他の法によらざれば人の財産を奪ってはならないと力説した。革命当局は、繰り返し繰り返し、不満を司法機関にもたらし、独占者やトーリィを懲らしめる問題を適当な官憲に委ねるよう民衆に求めた。さうに重要なことには、愛国派リーダーは、軍用糧食を民間にまわすことをめぐっての争いを鎮圧せねばならなかった。一七七七年八月のイーストハートフォード（コネティカット）での事件＝二〇人の女性が軍用砂糖を押収＝や、七八年秋のボストンでの事件＝タウン住民と船員がフランス海軍用パンの売却を強要＝などは、その典例である。[24] くわえて愛国派リーダーは、皮肉なことに、その行動が十分に革命戦争の進度に遅れをとっていないと力説した人々から、最大の容易ならぬ挑戦を受けた。フィラデルフィアで、中流アーティザンと知的職業人階層出身の急進的リーダーが、保守的商人と下層アーティサンおよび労働者のなかを調停していた。一方委員会委員は、タウンの交易業者への暴力の脅しを統御しつつ、手順での支配権を保ち、暴徒の行動に先制しようと奮闘していた。食糧価格上昇に際して五一人の民兵が、

下院に貧乏人と中流層が感じた困窮を訴えた。直ちに急進的リーダーは、七九年五月二五日に公開集会を設定、その朝民衆は、委員会に問題を一任するつもりはないとして棍棒で武装、商店主を訪ねて値下げを強要、その後の大衆集会は、「公衆はこのような異常な弊害の原因を調査し、それを防止する権利がある」と決議、麦粉独占を調査し、最高価格を決定する委員会を設置した。報道によれば、集会後多数の人々がパンを求めて喚声をあげ、群衆は、価格つり上げを理由に告発した商人、肉屋、投機家を市牢獄まで護送した。二年前のボストン同様、この地の群衆は、商品を奪って小売商人の権利を暫定的に停止する以上のことを目ざし、自分自身が、愛国運動の敵を確認・処罰する権力を掌握しようとしたのである。[25] 七九年秋、最後の群衆活動の一つがみられた。一〇月四日民兵が、フィラデルフィアの物価統制反対派ウイルソン（James Wilson）宅を攻撃し、一部は同市急進派指導者もくわわる上流層の一隊に追い散らされたが、その後下院は、貧者に麦粉を分配し、買い占め・独占への反対を再声明した。[26] いずれにせよこれらの場合当局は、抗争を弱め、革命が最初から依存してきた階級を横断する提携を義務づけることを希望した。しかし激しい衝突の恐ろしさのために、リーダーはこの提携を放棄した。一七八〇年までに、大陸会議も各邦も、物価統制政策を継続せず、また、民衆的政治手法を思いとどまるであろうことが明白となった。一七八〇年までに、革命は変わってしまったのである。

この変化の基本的な意義は、なかんずく女性の参加が物価暴動を革命的とし、その鎮圧を反革命的と特徴づけたがゆえに、我々が女性暴動を考察するとき明白となる。女性は、十八世紀初期から群衆行動に全く不参加ではなかったが、早期以上により多く食糧暴動に参与した。もっとも十八世紀には、女性の努力は、男性のように社会正義実現のためではなくて、親としての懲罰の見地で処罰を与えたとするのがもっともらしいと考えられていた。女性群衆に対しては様々な反応があったが、彼女らが隠匿商人に挑戦したとき、女性の限界をふみ越えていると論じたものはなかった。例えば、一七七七年八月のイーストハートフォードでの事件を論じた新聞の異議の真意は、暴徒が女性であったということではなくて、砂糖か軍用に指定されていたのにということであった。[27] 一方女性自身は、全体として本気で行動し、公的役割にふさわしいしきたりを使用する資格があると考えていることを示唆した。多くの場合少くとも少数の男性を雇用し、また同様に、自己の行動を正当化ないし合法化するために委員会や大陸会議に訴えた。しかし男性の存在は、明白に不要であり、委員会ほかの革命機関からの支持さえ重要でなかった。その上十八世紀の女性は、公正な値づけや隣人にふさわしい取り引きのような問題での自分たちの権限を疑わな

かった。女性は、家族のための売買に貢献した。彼女たちは、もうけを求める卸し売り業者に対抗することになれていた。また重要なことだが、彼女たちは、隣人の福祉に責任をもつ習慣を身につけていた。困難な時期での「施し」や相互支援は、男性だけでなく女性の権限内にあった。[28]

それはともかく、にもかかわらず、各地の女性は、母親や祖母がしなかった仕方で公務への存在を確立した。女性が、大陸会議ないし局地革命委員会に権限を要求したのは、異常で急進的な飛躍であった。彼女たちが、革命当局の活動を手本として行動し、軍隊でのように街道を行進し、また男性群衆の作法を実演したとき、これらの女性は、従来はなはだしく除外されてきた政治的背景のもとでの有能な演者の役を自らに振りあてたのであった。二つの条件が、そのようなことの発生を可能にした。一つは、愛国派リーダーの日常生活と政務とを分離していた境界線を無視しようと望んだ気持であった。一七六五年に始まって、エリートは社会的下級者と共同運動を行なった。喫茶、紡績、売買のような問題が重要な政治問題となり、それらの局地的、植民地的、帝国的様式の権力への掛かり合いがあらわにされた。民衆が、植民地代議会の権利防衛のためにエリートに協力しただけでなく、エリートが男女庶民に合流して、公正な取り引きについての局地的見解を支持し、民衆の文化的様式を助長した。愛国派リーダーは、熱意のある警戒命令とともに、男女庶民に公正さと公共善についての局地的所信を押し通す権限をもたせたのである。第二は、同様に重要なことだが、女性自身が抵抗する気になり、彼女ら自身に属し、愛国派リーダーのそれらの価値への掛かり合いがぐらつきくずれたときでさえ存続した、正当な戦争原因を納得したことであった。公正の理念、隣人にふさわし取り引き、施しが、植民地時代のアメリカ女性の日常生活の基礎であったことが重要であった。物価統制暴動に反応して愛国派リーダーは、政治に携わる国民の外にある民衆、まさに女性が、局地的基準に従って公正な取り引きを確保することを正当と考える、根深くて自立した信念と争わねばならなかった。[29]

戦時食糧暴動によって示されることは、十八世紀における特異な政治的役割の存在、タウンミーティングの外に形成され、参政権をもつ多くの人々のみならずもたないいくらかの人々の参加を拒まない「仲間」の経験であった。そして物価暴徒は、独立した判断能力を示し、エリートの正義の見解を納得しない権利があることを当然とし、自分自身の見解を保持・表明する能力を力説した。我々は、このような背景をもつ政治様式をどのように理解すべきであろうか。後世の自由主義国家の場合と違って、十八世紀のアメリカ人は、内部の区域で生活

し、親戚・同僚・近所住い・局地的交換によって創造され、一方で自由主義官僚政治国家の成長によって、他方で増大する大西洋市場内の契約によって侵食された、水平的つながりを認めていた。この仲間のなかでの関係は、平等ではなかったが互恵的で、全く同時に、経済的・社会的・文化的・政治的であった。女性の参加は、彼女たちの政治的能力が大西洋市場や自由主義理論から由来しない経済的・社会的権限を準備したという結論を明確にし、保証するものであった。実際女性の暴動参加資格は、後世の公民権の原型の一様式ではなかった。彼女らの政治的活動は、十八世紀思考が、家族と国家を公・私の領域に分けないで、両者が単一の社会の連続体にあるとしたがゆえに可能であった。換言すれば、女性の参加は、「仲間」の時間への特別の民衆の接近が許されたとき可能であった。[30]

ところで、革命期の食糧暴動に集まったのが自由主義仲間でなかったとすれば、それは共和主義のそれであったのか？　解答は、「共和主義」をどう理解するかにかかっている。食糧暴動に従事する仲間は無制限ではなかった。しかし、局地の庶民仲間のなかで行動する能力は、誰かを別にして上におく個人的な特質からではなく、共同体へのはまりこみから発生した。それゆえ排除は、民衆参加を限定することというよりも、それがもっとも共和主義的様式なのであった。とはいえ、自分たちはアメリカの自由のためで、より広い対英闘争の一部であったという暴徒の主張を軽視すべきではない。この主張は、愛国派エリートによって唱導された共和主義イデオロギィの説得力あること、民衆の意識をしっかりと捕えて変形させる力を示唆し、また、エリートの見解を自分のものとする民衆の文化の流れの力を示唆している。戦時物価暴動を確固として革命と位置ずける民衆の評価は、しばしば庶民の公正観を鼓吹した平等主義によってのみならず、隣人にふさわしい取り引きへの永年の理念によって深く特徴づけられた庶民の共和主義についての見解を立証する。暴動は、民衆の権利と幸福の理念の力を反映している。これらの理念は、都市の街路や農村の道路でそれを明確にして実行した男性、女性同様、交流の局地的網状組織と慣行のなかに備わっていた。なおこの理念は、イギリスからの多少の輸入品でもあり、民衆政治の伝統は、英国化を計る勢力とつながりをもつものであった。[31]

以上の透視図から考えると、愛国主義は、エリートと民衆の文化的流れの交差点で具体化し、支配者と被支配者の政治的手法を結合した。結局革命期の食糧暴動は、種々の階級のアメリカ人の間の意見不一致だけでなく、協調を示す。最初には、大陸会議、革命期邦政府、局地委員会は、経済的取り引きが政治的意義をもち、価格ごまかし屋はトーリィであり、革命は隣人間の義務の新しい基準次第で決まるという

考えに、暴徒とともに賛成した。愛国派エリートのメンバーが、中流農民、アーティザン、労働者、召使いと理念をともにしたとしても驚くにあたらない。政治的消息通は、十八世紀の共和国人についての小冊子を読み、とくに勅任総督と交渉・抗争したとき、自分の下院での政治的経験に照らして有意義である理論に気づいたといわれている。我々は、この意見を補足することができる。すなわちその理論は、いくらかのエリートにとって、アメリカ社会の種々の局地仲間のなかでの、また仲間への関係での彼らの経験に照らして有意義であった、と。それは、有限の平等という仮定ではなく、より押えきれない理念を創造した生存と水平的結びつきの耐久性を根拠として有意義であった。我々は、共和主義イデオロギィを単に輸入され、ろ過ないし流布された何かとしてではなく、局地的交換と局地的見解を背景として把握され、解釈され、適用されたものと考えるべきであろう。[32]

おわりに

戦時食糧暴動史は、愛国派政府の漸進的な物価統制政策破棄と暴徒の漸進的急進化の物語を含んだ。エリート愛国派は、群衆が革命委員会と交渉せずにそれに取って代わる可能性を予見した。一七七九年末までに愛国派指導層の分別ある人々は、反トーリィ感情を鎮静するのに熱心であった。通貨財政政策を放棄したとき大陸会議は、積極的な委員会と委員会外の民衆の警戒を必要とした急進的民衆政治に支持を与えなくなった。物価は倫理と関係がないと主張した人々は、街路の群衆によるのでなく、議会集会場の思慮ある人々による財政政策を作るために、群衆や委員会の無活動をよしとした。しかしなお幾年間は、民衆感情が、愛国運動を社会的・経済的公正にしばりつけるのに十分有力であった。一七七九年末、マサチュセッツ、ロードアイランド、ニューハンプシャーの商人がこれに答えて、再び自発的物価制限を始めた(数ヶ月間のみ有効)。大抵の物価暴徒ないしその同情者は、少なからず、その理念が革命がどうであるかについての彼らの思慮と切り離せなかったがゆえに、公正な取り引きへの彼らの信念を放棄しなかったといえる。実際革命後も長く、多くのアメリカ人は、倫理的価値と経済的生活との関連を主張しつづけたのである。[33]

失われたものは、一つの政治的様式として食糧ないし物価暴動を理解する社会的・政治的骨組であった。一七八〇年にエリートは、民衆

政治の是認から手を引き、大陸会議は群衆を落胆させ、富める保守的な人々の支持を求めた。戦後期のすべての変化のなかで、民衆の文化的様式の抑制、女性と生産の分離の増大、成長する女性と消費や余暇の結合、増大する社会的経験の公的・私的領域への関連づけは重要であった。これらの資本家的発展は、政治的活動の限界を定めた。革命自体が、政治的将来性に皮肉な不和を生んだ。結局新アメリカ政府は、「我々人民」という地位を主張した。その変革の現実が、投票という手順への参加の道を切り開き、選ばれた様式外の利用できる分野を閉鎖して、群衆の活動を終わらせるための理論的根拠を提供したのであった。[34]

以上本稿は、抵抗運動の局地的な交換や市場の倫理との関係をあとづけ、運動について一つの新解釈を示唆してきた。またより重要なことだが、本稿は、いくらかの愛国派男女のイギリスへの抵抗が、一方で局地的交換の網状組織内の、他方で広い大西洋市場内の経験をやりこなしたとき、彼らのイギリスへの抵抗が具体化したと主張する次第である。このような戦争努力への民衆の参加の解説は、愛国派著者や代弁者によって広められた見解が、受けいれられ、解釈された一つの背景を説明するものであった。

註

① Jesse Lemisch, "The American Revolution seen from the Bottom Up" in the Towards A New Past ed., by Bertin J. Bernstein (1968).

② Barbara Clark Smith, "Food Rioters and the American Revolution" in WMQ, L1 (1994), 3-38.

③ Ibid., 35-8. Appendix ――スミス女史は、何を暴動とみなすか困難であるとことわりつつ、控えめにみた三七の暴動の一覧表を作成している。

④ Edward Countryman, "Out of the Bounds of the Law" in Alfred F. Young ed., The American Revolution: Expolorations in the History of American Revolution (1976), 39; Paul A. Gilie, The Road to Mobocracy: Popular Order in New Youk City, 1763-1834 (1987), chap. I; Ruth Bogin, "Petitioning and the New Moral Econony of Post-Revolutionary America" in WMQ, XLV (1988), 391-425.

⑤ Jan Lewis, "The Republucan Wife: Virtue and Seduction in the Early Republic" in WMQ, XLIV (1987), 689-721; John Hoff-Wilson, "The Illusion of Cahnge: Women and the American Revolution" in Young, American Revolution, 384-445; Joan W. Scott, "Gemder: A Useful Category of Analysis" in AHR, XCI (1986), 1053-75.

⑥ Ralph V. Hartow, "Aspects of Revolutionary Finance" in AHR, XXXV (1929), 46-68; E. James Ferguson, The Power of the Purse (1961); Anne Benzanson, Price and Inflation during the American Revolution: Pennsylvania, 1770-90.

⑦ Massachusetts Archives, 231: 142-4; Constitutional Gazette, Aug. 26, 1776.

⑧ Connecticut Courant, Jan. 13, 1776, Feb. 16, 1778; Anne Bezanson, "Inflation and Controls during the Amerian Revolution in Penn-

sylvania : 1774-79" in Journal of Economic Histrory, VII (1948), supplement, 1-20 ; Kenneth Scott, "Price Control in New England during the Revolution" in New England Quarterly, XIX (1946), 453-73 ; Richard B. Morris, Government and Labor in Early America (1946).

⑨ Bernard Bailyn, Ideological Origins of the American Revolution (1967) ; Richard M. Jellison, ed., Society, Freedom, and Conscience : The American Revolution in Virginia, Massachusetts, and New York (1976), 77-124.

⑩ James A. Henretta, "Families and Farms : Mentalité in Pre-Industrial America", in WMQ, XXXV (1978), 3-32.

⑪ Allan Kuligoff, "The Transition to Capitalism in Rural America" in WMQ, XLVI (1989), 125.

⑫ Gary B. Nash, The Urban Crucible : Social Change, Political Consciousness and the Origins of the American Revolution (1979), 36-8, 132 ; Carl Bridenbaugh, Cities in the Wilderness : The First Century of Urban Life in America, 1625-1742 (1938), 383 ; Morris, op. cit., chap. I.

⑬ Henretta, "Economic Development and Social Structure in Colonial Boston" in WMQ, XXII (1965), 75-92 ; Kulikoff, "The Progres of Inequality in Revolutionary Boston" in WMQ, XXVIII (1971), 375-412.

⑭ Edmund S. Morgan, "The Puritan Ethic and the American Revolution" in WMQ, XXIV (1967), 8-13.

⑮ Smith, op. cit., Appendix.

⑯ Young, In the Streets of Boston: Artisans and Laborers in the Making of the American Revolution (forthcoming), chap. 6.

⑰ Bezanson, op. cit.

⑱ Journals of the Provincial Congres, Provincial Convention, Committee of Safety, and Council of Safety of the State of New York, 1775-77 (1842), I, 590, 609, 682, 714,

⑲ Russell Bartlett ed., Records of the State of Rhode Island and Providence Plantation in New England (1856-65), VIII, 85-9, and others.

⑳ William H. Whitmore et al., eds., Report of the Record Commissioners of City of Boston (1876-1908), XVIII, 260-2 ; L. H. Butterfield ed., Adams Family Correspondenece (1965), III, 172. 218, 223.

㉑ Edmund C. Burnett, Letters of Members of the Continental Congress (1923), II, 251 ; Whitmore, op. cit., XVIII,310-111.

㉒ Butterfield, op. cit., II, 295.

㉓ Smith, op. cit., 23.

㉔ New York Historical Society, Collections for the Year 1924, LVII and LVIII (1925), I, 301-3 ; Journals of Provincial Congress, I, 1007-10 ; Connecticut Courant, Sept. 8, 1777.

㉕ Eric Foner, Tom Paine and Revolutionary America (1976), 166-8 ; Boston Gazette, June 14, 1779.

㉖ Foner, op. cit., 165-70; John K. Alexander, "The Fort Wilson Incident of 1779 : A Case Study of the Revolutionary Crowd" in WMQ, XXXI (1974), 589-612.

㉗ Connecticut Courant, Sept. 3, 1777.

㉘ Frances May Manges, "Women Shopkeepers, Tavernkeepers, and Artisans in Colonial Philadelphia" (Ph. D. diss. Univ. of Pennsylvania, 1958).

㉙ Smith, "Social Visions of the American Resistance, 1765-75" in Ronald Hoffman and Peter Albert eds., "The Transforning Hand of Revolution": the American Revolution as a Social Movement Reconsidered (forthcoming).

㉚ Lance Banning, "Jeffersonian Ideology Revisited: Liberal and Classical Ideas in the New American Republic" in WMQ, XLIII (1986), 11-2, 18.

㉛ Banning, op. cit., 3-19; Joyce O. Appleby, "Republicanism in Old and New Contexts" in WMQ, LXIII (1986), 20-34; Stephanie McCurry, "Two Faces of Republicanism: Gender and Proslavery Politics in Antebellum South Carolina" in JAH, XLXVIII (1992), 1245-64.

㉜ Bailyn, op. cit.; Timothy Breen, "Narrative of Commercial Life: Consumption, Ideology, and Community on the Eve of the American Revolution" in WMQ, L (1993), 471-501.

㉝ Smith, "The Politics of Price Controls in Revolutionary Massachusetts" (Ph. D. diss. Yale Univ., 1983), chap. 7; Countryman, "The Uses of Capital in Revolutionary America: The-Case of the New York Loyalist Merchants" in WMQ, XLIX (1992), 3-28.

㉞ Christine Stansell, City of Women: Sex and Class in New York, 1789-1860 (1986).